

自分は最近、大学で哲学の講義を受けた。その講義を受ける前の自分は、哲学といえば哲学者とその有名な言葉がいくつか浮かぶ程度で、その内容については全くと言っていい程、よく分かっていなかった。そのため、哲学という学問に気後れしていたことは否めない。そのような中、大学の講義選択の際、哲学入門という講義の存在を知った。そこで、これを良い機会として哲学に少しふれてみようと思い立ち、その講義を受講することにした。

その講義の中で、自分が耳にしたことのある有名な言葉の本当の意味や、名前だけを知っていた哲学者の、自分が知らなかった思想などを学び、聞きかじり程度だった自分の哲学の知識がどれほど本質からずれていたかを気づかされた。そして、自分が知らなかった哲学者の思想も講義の中で話されていて、その思想に対し、なるほどと納得することも多々あった。そうした講義を通して、哲学とは、自分たちから遠く離れたことを思考する高尚な学問ではなく、むしろ身近なものについて、その意味や由来に自分なりの解釈を加えようとする、万人が思考することのできる学問であると考えようになった。自分の中で、哲学が親しみを感じる学問になった、これが今回の講義での一番の収穫だったと感じる。

また、その講義の内容そのものに関して、「私」、つまりは自己の、本質、その存在証明、そしてそうしたものを認識する過程など、昔の哲学者は様々な観点から「私」について考えていたのだと感じた。そうした思索の中で自分が一番に印象に残っているのは、自己と他の存在との関係性についてであった。その関係性を自分の判断基準で分けることにすると、「私と言葉」、「私と他者」、「私と身体」の3つに大きく分類できると考える。そこで、「私と言葉」、「私と他者」、「私(精神面の)と身体」の三つのテーマについて、自分なりの哲学を考えてみることで、今回の体験の総括としようと思う。

まず、「私と言葉」についてである。講義では、「言葉は『自分の思考の劣化コピー』や『自分の思考を縛るもの』などとされることがある。しかし、そう感じるのは言葉を『既に固定化された枠組み』と見ている故である。そうではなく、言葉は、発せられるその時、その場所で、初めて、その意味と共に生まれるものと考えることが可能で、それ故に言葉の本質はそれが初めて現実と結びついたその瞬間にこそ存在する」と話されていた。それは、一つの言葉が複数の意味を持つからという単純な理由だけではない。ある言葉を最初に他者または書物から知る場合、その時点では一つの固定した意味でしか自分の中には存在しなかったかもしれない。だが、それを実際に使用する時、その言葉はそれを知った時の意味と共に、そのまま使われるとは限らない。例えば、口に出す場合は、その時の声色や表情によって、自分なりの微妙なニュアンスが加わるだろう。文章の中で用いる場合は、その文脈によって言葉が一般的な意味から外れたり、多層化したりと大きく変化することがある。このように、その場の状況によって、言葉はその意味と一緒に常に変容していく。その変容は、言葉のすばらしい本質のひとつなのではないかと自分は考える。

また、言葉は自己の精神面にも影響を与えらると思われる。何かが自分の頭に浮かぶ時、それは抽象的ではっきりと形になっていない。その頭の中の何かについて考えようとする時、それを具体的な形にしようとする。もし言葉を最初から固定化されたものと考えたら、先

に述べたように、その言葉は思考の劣化コピーと見なされるだろう。だが、その話には、自分の思考が既に完成されたもの、という前提が存在している。思考が完璧なものなら、その別媒体における表現には漏れが出てしまうが、言葉にする前の思考は、まだ形が定まっておらず未完成なものだ。だとしたら、言葉を思考の模写とみなすのは完全に正解とは言えない。では、言葉は思考の何なのか。そこで自分は、言葉とは、そうした抽象的な思考に形そのものを与えているのではないかと考える。つまり言葉は単なる思考の媒体ではなく、思考を構成するそのものではないのだろうか。故に、いわば「設計図」と言える思考は、それ単体では未完成であり、言葉があって初めて、それは「製品」として完成するのだと自分は考える。その条件として、言葉は、あらゆる原初の思考に対応したものでなければならない。言葉が固定化されたものであるならば、その無数にも等しく多様化した原初の思考に応じることが不可能だろう。すると、言葉がはっきりとした形を見せるのは、思考を形にする時と同時なのではないだろうか。頭の中に渦巻くあらゆる知識や経験を思考の下に結集させ、今の自分の思考を表現する、一つの「私」の言葉を作り出す。言葉には、そうしたことを可能にする「多様性」と「可能性」を有しているのではないかと自分は考える。

次に、「私と他者」についてである。ジャック＝ラカンが、「人が自身を鏡などで初めて知覚したとき、それを自分だと認識するには、他者、多くの場合は保護者からの承認が必要」と考えていたそう。己が自分だと感じた存在を他者にも認めてもらうことで、その判断に確信を得る。それは、私を「私」として実感する最初の経験だと言える。ところで、この話は他者と「私の存在」との関連性に注目したものだが、「私」そのもの、特にその中でも、精神面のそれとの関連性はどうか。その事について自分は少し考えてみたいと思う。

それに関連して、まず自分がすぐに思い浮かぶのは「感化」である。他者を見たり、その人物について聞いたりする時、そこに何らかの感情を抱く。その人物を好意的に感じれば、それに親しみや憧れといったプラスな感情を感じる。より近づこうとしたり、自分も見習おうと己の手本にしたりするだろう。逆にその人物に敵意を感じれば、それは嫌悪や忌避といったマイナスの感情につながる。その人から距離をおこうとしたり、反面教師としたりするだろう。自分の中での、ある人物の良し悪しについてのそうした基準は、人によって様々である。では、その判断基準は、どのようにして決めているのだろうか。生まれつき備わっているものとは考えにくく、それは生きていく過程で形成していったものではないかと考えられる。始まりを除いた途中経過においては、自分の今持つ判断基準で人を判断し、その判断が最終的に生み出す結果によって判断基準は見直される。そしてその後、暫定的なものとして自分の新たな判断基準が決まると思われる。では、その始まりはどういったものなのだろうか。全くの基準のない状態で人を判断する場合、一般的には、その基準は初めて出会う人、多くの場合その保護者の基準を用いると考えられている。だが、それは厳密に言うと少し違うのではないだろうか。なぜなら、初めて出会う人の判断基準、広くは道徳観といったものをそっくりそのまま目にし、完璧にコピーするのは現実的には不可能だからである。事実、保護者と幼い子供の例を見ても、その子供の基準と保護者の基準が微妙に食い違うこと

がある。そもそも大人が自身の人生を通して作り上げたその基準を、まだあまり経験のない子供がそう簡単に模倣できるとは思えない。そこで、人(大体は子供)が自らの判断基準を初めて作りあげる場合、そこでの重要な存在は他者の基準そのものではなく、その他者とのふれあいの中で抱くその人自身の感情なのではないだろうか。人と初めて触れ合う際、その人を観察して、その人柄の一端を無意識であるにしろ感じた時、好意的に感じたら、その人は良い人、不快に感じたら、その人は悪い人、とみなす。そうしてできた最初の判断基準は、単純だが、それ故に十分に納得のいく基準となる。故に、本当の意味でその人に特有なものとは、人生のあらゆる基準の中でも、そうした最初に獲得した基準なのではないか、と自分は思う。

また、他者は、自分に何かを気付かせる契機にもなりうる。エマニュエル＝レヴィナスは、「他者は、どうしても自分の中に取り込めない他者性を持つ。そのため、他者は『異質なものを個として扱わず、自身の設定した全体の一部に都合よく配置する』知の暴力に気付かせる。そうした他者との邂逅によって、全体性を形成する言葉が『外に伝わる』という意味を初めて持つという出来事が起こる。」としたそうである。つまり他者は、自分がどうしても自覚できない知の性質に気付かせてくれる、そのような貴重な存在なのである。そして自分は、「知」のことだけでなく、自身の思考形態、強いては精神の変容の鍵にも他者はなり得るとも考える。前段落にて言葉について、「言葉は思考を形づくるもの」と自分は述べた。その言葉を見聞きした誰かがいた場合、その人の反応から、他者が考える自身の思考の姿を垣間見ることとなる。そして、それによって自らの思考を再認識し、さらに自らの思考パターンに手を加える契機となる。それ故に他者という存在は、思考の停滞を防ぎ、流動性を有する精神の在り様を維持する一助となっているのではないだろうか。

最後は、「私と身体」についてである。ここで言う「私」とは主に精神面のことに関してのそれである。身体について、メーヌ＝ド＝ビランは「身体は精神と不可分で、『内奥感の原初的事実』を自己にもたらす」と結論付けたそう。一方、メルロ＝ポンティは「自分たちは外界を自身の身体を利用して観察するが、身体自体を観察することはできない。その身体に触れるのは、身体がうまく働かなくなった時に、いつも目にしていた身体の動きの裏に隠された、身体の働きが存在を初めて知る時である」と言ったそう。つまり、身体は「精神と外界の橋渡し」を担っている黒子のような存在と言える。外界とつながる時、つまりは外界のものを知覚する時と、逆に自身の思考を外界に発信する時の両方の場合で、身体は精神にかかせない存在である。

では、それ以外に身体が精神に対して担っていることはないのだろうか。そこで、もしも自分たちが、外界とのやり取りを身体無しで行える精神だけの存在であった場合のことを考えてみる。外界との関わりを精神だけで直接果たせたならば、生命としての活動がスムーズになり、自分をより発展させられるかもしれない。だが、身体がないことで失われることもあると自分は考える。それは肉体の成長や傷痕など、時と共に身体に刻み付けられたもの、強いて言うなら「身体の記憶」である。精神は、外界が持つ物質的な性質を持たない以上、

それのみでは自分たちが納得のしやすい物質的な存在の証は持ちえない。それに対して身体は、体の記憶という、己が今まで存在してきたという物理的な痕跡を有している。それ故に、精神が身体を備えていることで初めて、今までに自身の精神が外界と物質的なつながりを有していたという証拠を獲得し、自身の精神の存在を確信できる。つまり、身体は「私」の存在でいうところの「鏡」と「他者」の役割の両方を精神に対して担っているのではないか、と自分は思う。

以上のように、「私」と他のものとの関係性を考えていった結果として一つ言えるのは、「私」というものは、他の何かとのつながりなくしては存在が成立しないものだということである。そして、たくさんの他の存在との関係の中で、「私」というものは絶えず見直され変容していく。だから自分は、これからの様々な「他」の存在との出会いを契機にして、「私」が変わっていく様を身をもって認識し、その度に「私」という存在を感じていきたいと思っている。